



Title	成人保健部会の答申によせて : 自信をもって対策を
Author(s)	藤本, 伊三郎
Citation	大阪公衆衛生. 1983, 47, p. 25-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83983
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

成人保健部会の答申によせて

—自信をもって対策を—

大阪府立成人病センター
調査部長

藤 本 伊 三 郎

昭和58年2月、老人保健法が施行され、成人病検診が法的根拠をもつに至った。大阪府衛生対策審議会は、従来の特定疾患部会から成人保健部会を独立させ、「成人保健事業の推進方策」を審議して、58年9月、答申書を提出した。これにより成人病対策が再発足するのであるが、この機会に、従来の成人病対策、ことにがん対策が成果をあげてきたかどうか、ふりかえてみることにした。

大阪府では、大阪府医師会の協力をえて、昭和37年からがん登録事業を行っている。その資料から図1、2、表1を作った。

図1は、胃がん患者の受療状況を示す。年を逐って、内視鏡、組織診の受検率、手術率の上昇してきたことが示された。同様の傾向は、他の多くの部位のがんでも示された。

表1は、大阪府全域のがん患者の5年生存率であり、肺がんを除き、年を逐って上昇してきており、その差は有意であった。

図2には、胃がんの訂正罹患率（Iと表示）と訂正死亡率（Dと表示）との減少割合を、昭和38～40年を1.0として、年齢階級別に示し

図1 胃がん患者の受療状況

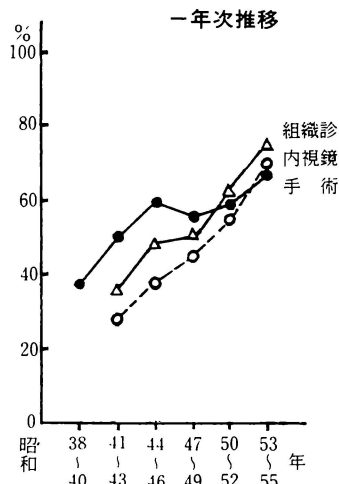


表1 がん患者の5年相対生存率

昭和年	全部位	胃	子宮	肺	結腸
40～45	20.8%	17.3%	49.1%	6.0%	18.5%
45～49	22.4	19.1	52.7	6.0	21.9
50～54	24.6	23.8	55.7	6.5	28.2

た。青壮年層では、罹患の減少より死亡の減少の方が大きいことが示された。

同様の傾向は、子宮がんでも示された。

以上の諸成績は、2次予防に重点を置いた従来のがん対策が、効果をあげてきたことを明確に示している。私達は自信をもって、従来の2次予防対策を拡充してゆくとともに、1次予防の面をも開発して、将来は、がんそのものの発生を抑制したいものである。

図2 胃がん(男)の訂正罹患率と訂正死亡率との減少比

(Iは罹患、Dは死亡の減少率曲線を示す)

